



「もののけ姫を観ながらふと思ったのは、20年前の個人的な思い出だった。

国民休暇村に先行している友人達を追って、リュックを背負って一人でバス停からキャンプ場へ向かって歩いていた時、山林の中へと入る近道の木のブレイトがあつて直進で林を突き、きるルートだと地図で確認してその道に入っていたら誰も通らなくなっていたのだらう。たちまち道が判らなくなり、霊山と言われていた木曽の御岳山の山林の中を半日さ迷ってしまったのだ。

野性のバラの群生をポンチョに軍手の完全武装で両手を顔の前にかまえて突きめけたり、先が明るくなっているのので出口かと走っていくとナント崖の上に出て、眼下一面に広がる大樹海……”出られるのかいなと正直途方にくれながら、人の手が触れていない山々の空気を胸いっぱい吸いこみ、生命が満ちあふれている大気のふくらみ、鳥のさえずる音の他は自分の足音とカチャンカチャン鳴るリュックに吊るした飯台の音と、ちゃっかり他人事のように山歩きの醍醐味も満喫していた。

歩く以外はヒマだからいろいろなことを考えた。人間はちつぽけだよなとも思ったし、でも自分は本来その大自然の一部分で、だから山にエネルギーをもらいに来るとして、そしてこれは翌日のことだけれど、初夏の山間部に広がる野菜の畑の美しさ、ここでも人間が働いているんだという別の生命感も感じた。「もののけ姫を見ながら思ったのは、ああ、あの日の空気がこの映画には満ち満ちているなあ」という不思議な第一印象だった。

風になって疾る少年アシタカ

「もののけ姫」の物語は、少年アシタカをガイド・リーダーとして進行する。

突如、山林から襲来する、まがまがしきタタリ神から村の人々を守るため、愛用の弓を射かけたアシタカは、タタリ神を倒すものの、「呪い」をその右腕に受け、死を逃れられない宿命を背負うことになる。老巫女は、西へ行けば、呪いを解く方法が見つかるかも知れないと運命と立ち向かう決意があるかと問い、アシタカは滅亡をふりまく全ての謎を解くべく、冒険へと旅立っていく……。

物語の原初的なエネルギーを感じさせる王道の「冒険ストーリー」の出だしで、描写は少ないながら、村の共同体全員の息子であるアシタカやカヤを始めとする娘乙女達の交情、カヤはいずれ自分がアシタカの嫁となり、この村を支えていくはずだとも考えていた（たからこで、アシタカは彼女を守るため、弓を放ったのじゃないか―掟を破り、アシタカを見送り、自分もつとも大切にしている黒曜石のナイフ（おそらく代々愛する子供へと伝えられてきたカヤの家の宝物のはずだ―だからこそ自分がもつとも大切に想うアシタカを守ってくれろ）と彼女が思ったのだらう）をアシタカに渡し、アシタカはその思いを胸に冒険へと旅立つのである。アシタカは風となって疾る少年で、クライマックスのサンを救おうと、山野を駆け回るシーンはその思いが体の「メートル先を疾るエモーション」が映像にみなが、宮崎駿監督作品にとって「未来少年

コナン」のコナン以来の筋肉がエネルギーの波動ではじけるキャラクターを生んだ。（天人っぽいコナンのイメージ・ボードの表情を思い出していた）神話時代の古代国家の末裔であるため、まるでサノオのような怪力と脚力、筋力、胆力を見せるのがフィクションの御愛嬌で、女性陣への如才ない大人びた言動やふるまいも作者の狙い以上にこのキャラクターの育ち方や性格、高貴さを描きたした。その女性キャラへのセリフに、何度心のなかで「ブツと吹き出し」うまい!!と思っただらう。アシタカのセリフにあふれるユーモアは、頼もしきさえ感じた程だった。

その大地に立つ凛々しさは、人生をまさに自分の力で切りひらく人間のさわやかさで、その心の中をいつも山を疾る風が吹きめけている感があつて、人里に降りてくるべきではなかったというセリフにこめたニガみは、恐ろしいほどだ。全編、その疾るアニメーションの解放感がすばらしい。アニメだけが持ちえるビジュアル・ヒーローの表現で、まさにコナンに直結する考えるよりも早く肉体が走りだすヒーローであった。

命燃やすもののけ姫

もののけ姫サンは、心の中にいつも炎のような想いがうずまきヒロインであった。

おそらくその心が安まるのは、母親であるモロの君（美輪明宏屈指の名演！そのエモーショナルなセリフにこめた哀感と怒り、高貴さ、残忍さはギャ

ラクターを120%描ききった!!）のニコ毛につつまれた時ぐらいじゃないだらうか。兄弟の大神はまだ若すぎるらしく、破壊衝動に身をまかせすぎで、サンをいらだたせるばかりのようだ。

モロの君がアシタカに語るサンがなぜ自分の娘になったかというストーリー。大神に食われないため、おろかな人間共はまだ生まれたばかりの娘をイケニエとして、彼女に差しだした。おそらく、森の奥に捨てられていた赤ん坊は、火のように、「生きたい」と鳴き、その小さなひよわで、ふるえる赤ん坊を見下し、そんな自分達の仲間で一番弱い者を犠牲にぬくぬくと生き残ろうとする人間のズルさ、非情さ、ゴウマンさに、モロの君は怒りに心ふるわせ、人間を憎み、見下げ果て、その村を襲い、いくつもの人々を食らったのではあるまいか。まだ自分の意識すらない赤ん坊は、まるで、もののけの一員で、そんなつもりはなかったモロの君はフツと気まぐれから、自分の娘として育ててみるか？子供は皆男の子だったし―と思っってしまったのじゃないか。

大神の目から見れば、その赤ん坊の生きようとする生命力は、ふきあがる炎のように見えたはずで、あの口調で「オヤオヤ、そんな小さなお前にも私達と同じ生命の力があり、まるで大風にゆれるロウソクのようにふるえているのだね……いいだらう、もののけとして育てば、その炎はどこまでも熱く、大きくできるだらうさ。」そして、人間の心の炎の小ささを笑ってやればいい」とでも、語りかけたんじゃないか!?

風となつて疾る少年アシタカ

Ashitaka Sweeping Across the Land Like a Powerful Wind



アシタカ

【風となって疾る少年アシタカ】

Ashitaka : Sweeping Across the Land Like a Powerful Wind

曇り無きまなこで
見定め、きめる。

Are you prepared to stare your own destiny in the eye?



を、ぜひ皆で考えてほしい。

その美しさと猛々しさ、弱者をこの過酷な戦国時代に守ろうとするヒューマニズムと戦いたいものとわめか迫る胆力、自分の死を冷静に見つめるパッション、そのまま男性キャラにすれば、厭味そのものののだが、紙一重で力強く美しさに昇華し、妖しささえ感じさせるキャラクターは、大人になった峰不二子と申しますか、実に複雑なエモーショナルテーマがみなぎるキャラクターになった。

戦闘シーンで美にたくさんの人間が切られ、砕け、無残に死んでいく映画だが、昔も今もそれが戦場の真実で、きれいな戦場など現在でさえありえぬフィクションなのだ。リアリスト宮崎駿監督は、人間の有り様として今回よけるわけにはいかなかったのだ。

私達が自分の民族の民族叙事詩として、語れる香りがあって、もう一息だったが、日本の新たな神話、宮崎駿が考えた“私達の祖先の壮大な物語”というフィクションの気迫が何よりうれしかった。

ディダラボッチも森がもつ元気だった頃は、もっと大きく背中突起も翼となり、夜となると星界へと飛翔する星渡りのヒトなんじゃないか(星から星へと生命の種をまいていくのだ、だから体の中に星があるのではないかと妄想は果てしなく広がってしまふ。

2時間15分もの長尺なのに、20枚の中編小説を読んだ時のようなコンパクトな壮大さとスケール感、物語の手応えが見事だった。本来、3時間半ぐらいを2時間15分に刈り込んだ演出の抑制力、計算ぶらみが楽しかった。2回か、3回か観て、行間にあふれている作者のイメーჯとエキゾーションを、しゃぶるように見極めて味わってほしい！

池田憲章

戦士でない心の伸びやかさは、もののけ姫
ードを片方で決定づけている。

男共のバカさかげんは、笑っちゃうほどで、
しかに巨視的に見れば、戦争の歴史って、こ
うことなのかも知れないね。

エボシ御前と戦争シーン

エボシ御前と戦争シーン

宮崎駿監督がエボシ御前に託したテーマは何かを、ぜひ皆で考えてほしい。

その美しさと猛々しき、弱者をこの過酷な戦国時代に守ろうとするヒューマニズムと戦いもいとわぬ気迫、胆力、自分の死を冷静に見つめるパッション、そのまま男性キャラにすれば、厭味そのものののだが、紙一重で力強く美しさに昇華し、妖しささえ感じさせるキャラクターは、大人になった峰不二子と申しますか、実に複雑なエモーションとテーマがみなぎるキャラクターになった。

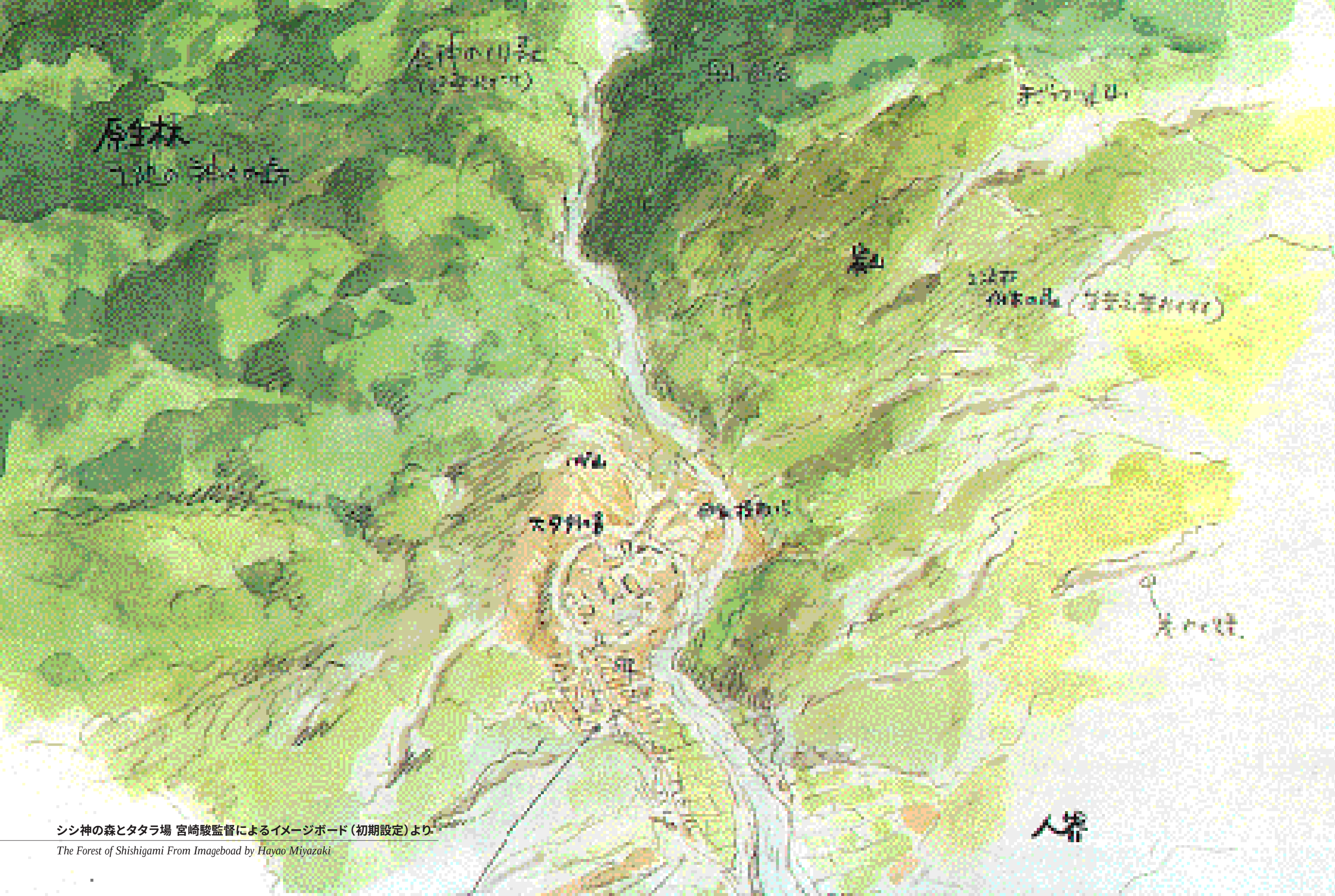
戦闘シーンで実にたくさんの人間が切られ、砕け、無残に死んでいく映画だが、昔も今もそれが戦場の真実で、きれいな戦場など現在でさえありえぬフィクションなのだ。リアリスト宮崎駿監督は人間の有り様として今回よけるわけにはいかなかったのだらう。

私達が自分の民族の民族叙事詩として、語れる香りがあっても、もう一息だった、日本の新たな神話、宮崎駿が考えた「私達の祖先の壮大な物語」というフィクションの気迫が何よりうれしかった。

デイダラボッチも森がもつと元氣だった頃は、もつと大きく背中突起も翼となり、夜となると星界へと飛翔する星渡りのヒトなんじゃないか(星から星へと生命の種をまいていくのだ、だから体の中に星があるのでないかと妄想は果てしなく広がってしまう。

2時間15分もの長尺なのに、200枚の中編小説を
読んだ時のような、コンパクトな壮大さとスケール
感、物語の手応えが見事だった。本来、3時間半ぐ
らいを2時間15分に刈り込んだ演出の抑制力、計
算、ぶらみが楽しかった。2回か、3回か観て、行
間にあふれている作者のイメーჯとエキシヨンを
しゃぶるように見極めて味わってほしい！

池田憲章



シシ神の森とタタラ場 宮崎駿監督によるイメージボード(初期設定)より

The Forest of Shishigami From Imageboard by Hayao Miyazaki

サン

【犬神の娘の憎悪と怒り】

San : Inugami's Daughter's Rage and Hatred

だまれ私はヤマイヌだ
人間なんか
大キライだ!!

Shut up! I'm a wolf! I loathe humans !!

サンという名のヒロイン

「プリンス・オブ・モノノケ」というタイトルにも関わらず、サンはヒロインとしての印象が驚くほど希薄である。やはり清濁あわせのむエポシ御前の凛とした美しさの方にもどうしても惹かれてしまうし、実輪明宏のモロの君（お母さん）の演技には震え上がるほどの感動をおぼえたが、宮崎作品のヒロインというなら冒頭に出てくるだけのカヤの方がよっぽどそれらしい。特に、迫り来るタタリ神に向かって山刀を抜き放つりしきと、旅立つ兄にお守りの小刀を渡す健気さは、やはりラナやクラリスの流れを汲むものといえるだろう。では、サンにまったく魅力がないのかといえば、もちろんそんなことはない。アシタカが初めて彼女と出会う、血まみれになることをいとわずにモロの傷口から毒を吸い取るシーンの衝撃（振り向いたとき、耳飾りが打ち合って澄んだ音を立てる演出が心憎い）。タタラ場でエポシと対決し、アシタカに止められるシーンで見せた、タタリ神に去る表情、自分が助けられたことを知って、しだいにアシタカに心を開いていくまでの変化——アシタカに「生きろ、そなたは美しい」と言われて驚く顔や、ヤツクルを「食べていい?」と聞く兄弟山犬に「だめ」と応えるシーンの微笑まじさ。眠っているときに見える無防備な素顔、どれをとっても、サンのキャラクターを際立たせる演出である。

しかし、それにしては、同じように自然見だったコナンの奔放さも、あるいは自然と共に戦い、共に生きようとしたナウシカと同様の峻烈な優しさも伝わってこない——ような気が僕にはした。この印象の違いがどこから来ているのかといえば、答えは簡単だ。こ「もののけ姫」という作品が、タイトルに反してアシタカという純粹ヒーローを主人公にしているからである。

ここ数年の宮崎作品は、ナウシカをはじめメイやサツキ、キキ（脚本とプロデュースを担当した「耳をすませば」の雫も含めて）といった少女ヒーロー

の物語が人気を博してきた。「ラピュタ」や「紅の豚」、またそれ以前には「未来少年コナン」「カリオストロの城」などのような少年（の心をもった中年）が主人公の作品もあるが、その場合は「守られるべき世界の宝」としての少女たちがヒロインとしての魅力を存分に発揮していたと言っている。何も考えていない無邪気なコナンや逆に分別のついてしまったパンより、世界全体を相手に一歩も退かず立ち向かうラナやクラリスの勇気の方がかっこいいに決まっているではないか（これは多かれ少なかれパズーとシータ、ポルコとジィナの関係にも共通している）。

さらにまた、かつての宮崎作品は可憐なお姫様を悪者たちから救う王子様の冒険物語という、ファンタジー以外のなにものでもない構造をもっていた。今回の「もののけ姫」の原型となったイメージボード（83年刊の講談社「宮崎駿イメージボード集」初出、現在は徳間書店から絵本の形で出ている）を見ても、本来は戦国時代を背景にした「長靴をはいた猫」という趣の内容で、もののけと恐れられる大山猫のもとに嫁いだ幼い姫君が、実は本性は若者の心をもったもののけと共に故郷の人々を苦しめる悪魔を退治するという、何とも胸躍る時代劇メルヘンだったのだ。

宮崎作品のイノセントは、すでに「ナウシカ」とそのコミック版を描く段階で失われている。でなければ「となりのトトロ」の、二度と帰ってこない日本「の風景や、「魔女の宅急便」「紅の豚」の、あり得たかも知れない、もうひとつのヨーロッパが登場してくるはずがないのだ。もはや、そんな幸福な時代に後戻りできないことは、作者自身がいちばんよくわかっている。だからこそ、こんなアクのないヒロインと内省的な（しかし、行動と決断は俊敏な）ヒーローのラブ・ストーリー……それも別離で終わることが運命づけられている出会いの物語を、あえて宮崎駿は作らねばならなかったのではないかな。

いや、どうも結論を急ぎすぎたようだ。改めて考えてみれば、サンが宮崎作品のヒロインであることは疑う余地がない。やや淡泊すぎるとはいえ、アシタカが初めてサンを見て心を奪われるシーンと、妹からもらった守り刀を山犬に託して届けさせる演出で、そのことははっきりと示されている。だが、今回はそれ以上にアシタカのヒーローぶりが鮮烈に見る側に伝わってくるのである。

確かに「ナウシカ」のグレイドアップ・バインヨン（あるいは焼き直し）といった評価もあるに違いない。ハッピーエンドに見えてしまうアン・ハッピーエンドのラスト、巨神獣を連想させるテイタラボツチのイメージ、自然の暴走を食い止めるために戦う主人公たち、ナウシカとサン＋クシヤナとエポシという組み合わせで分散しているヒロイン像（カヤはアスベルの妹ラステル、おトキは「魔女宅」のおソノさん、エウルスラか……等々、明らかに共通したアイコンと構造がそこには存在するのだから）。

けれども、「生きろ」というテーマ・メッセージが少年の言葉として発せられていることを考え合わせれば、これは明らかに宮崎駿自身の心の声という以外になく、ヒロインを守るために（結果的にそれが世界を救うのだが）戦っていた宮崎作品のヒーローが、あえて世界に目を向けたことにこそ、この作品の大きな意味があるような気がするのである。

（中島伸介）

Impertinent: Don't flout your piddling misfortune at me! Shall I cut that arm off for you ?!

さかしらに
わずかな不運を見せびらかすな。
その右腕切り落としてやろう!!



エボシ御前

【あらゆる辛酸をなめた孤高の女夜叉】

Lady Eboshi : A Female Yasha who experiences all hardships in proud loneliness

に刺客をなぐチイスもあるかも知れない。
突然孤児となつた年頃の彼女は自分も殺されると覚悟したかも知れないが父を滅ぼした相手の息子にくどかれ別にお父息子でなくてもいい結婚させられる。しおらしくない。見せかけてエボシはあなう相手を殺しかける。けれども果たせず。そのまま引き離され売り飛ばされる。もちろん遊女に。
しかし歯を食いしばって彼女は生きる。泥沼の底から脱出する日をうかがって。その時自分の周囲の娘たちに目が行く。不幸なのは自分だけじゃない。ここから逃れる夢ささ見られない人々もいることを彼女は知す。
エボシ御前という名は実はその時の源氏名が烏帽子をつけた男舞いがつまちた。つまり鎌倉時代の「白拍子」(義経の恋人静御前がそうだった)な舞が巧みでそれが人気を呼び名前にしたのだ。
ある日一人のかなり羽振りがよくたくましい男が客になり。そのまま強引に彼女を身受けした。身受けというよりは強奪だったかも知れない。この男は何者か。
宮崎さんはエボシは「倭寇」にさらわれた女と説明した。ただ注・編集部の話。倭寇とは要するに海賊。エボシをひきさらった男は海賊船の首領だ。
この時代。鎖国なかにいていないから。明国との貿易は盛んだ。た。倭寇は貿易船の襲撃のはず。朝鮮半島や明国で農村を荒らし。米や人を略奪し。憎まれ。恐れられた。明も高麗も幕府に取締りを依頼している。
彼等の前身は九州や瀬戸内の大名の水軍であり。また貿易商人たちが必要に迫られて武装した結果。海賊化したものもある。おちびらに輸入できないものを。そかに取引して不思議はない。人身売買。当然ありうる。この男。エボシの気品にほれ込んで手に入れ。もてあましたり飽きたりしたら。明国で再度売り飛ばす。彼の過去がエボシの父を倒した大名の水軍だったら…。こりゃちょっと嫌すぎるかな。
エボシは泥沼からの脱出の幸運をむだにはしなかった。彼女の武術は。多に彼女を海賊の重要な戦力として認めさせ。日本の大海賊第一号となる。渡った明国では目を輝かす。各種の知識を吸収する。火薬はもと。中国で発明されたものだが。その火薬を応用したさまざまな武器。大小の銃砲が彼女を魅了する。海賊船の武力アップのため。として。彼女は射撃を学ぶ。銃の製造法も調べ。メス。タイ。する。火薬についても研究する。見る見る彼女は銃火器のエキスパートになって行く…。

海賊夫人

さて…エボシは海賊船の首領の女房。た。ても威張り。あ。す。タイプではない。遊女の時代。に。る。んな人間。い。んな。遊女。を見てきて。も。いる。お姫さま。の。ま。ま。なら。は。到底。不可能。の。間。と。数。の。人。身。分。の。高。い。の。低。い。の。立。派。な。人。も。下。ら。ない。人。も。幸。せ。な。の。も。不。幸。な。の。も。あ。り。あ。ら。う。と。人。と。出。会。つ。て。い。ろ。い。ろ。と。つ。つ。被。女。は。海。賊。の。手。下。た。ら。も。お。お。し。人間。として。扱。う。た。そ。し。て。自。己。が。た。だ。に。つ。れ。次。第。に。手。下。た。ら。に。慕。わ。れ。人。気。者。に。な。つ。て。い。ろ。い。ろ。の。お。お。し。な。ら。う。が。被。女。が。海。賊。行。為。自。体。を。どう。思。つ。た。か。は。定。か。た。ない。が。一。種。の。職業。として。割。り。切。つ。た。の。だ。ら。う。た。だ。し。海。賊。船。に。乗。組。む。を。一。夜。の。歓。楽。に。使。い。果。た。す。よ。う。な。こ。と。は。せず。ひ。う。と。思。つ。た。の。だ。ら。う。手。下。は。ひ。ろ。く。り。した。か。も。知。れ。ない。が。い。ろ。い。ろ。の。こ。と。や。が。て。新。しい。船。を。買。う。の。に。必要。だ。か。ら。ね。など。と。説明。さ。れる。と。い。う。い。ふ。尊敬。する。こ。と。に。なる。

「エボシは明らかにその手下の一人だ。彼の忠勤がりに例えは。エボシがお姫さま。あ。つ。た。時代。の。若。婦。人。とい。う。よ。う。な。想像。も。して。み。た。が。ち。う。と。カ。が。悪い。から。それ。は。ない。エボシを含めて。エボシの。そ。は。い。る。男。と。も。は。い。んな。海。賊。だ。ら。う。つ。い。で。だ。か。ら。言。つ。て。お。く。が。倭。寇。は。被。害。者。の。高。麗。や。明。サ。イ。ド。の。表現。だ。

エボシを妻にした首領は。う。な。な。が。宮。崎。さ。ん。は。エボシに殺された。と。言。を。ただ。注・編集部。の。話。と。して。エボシの。美。し。さ。した。た。か。も。頭。の。よ。さ。女。房。の。す。べ。が。自。慢。の。タ。ネ。だ。な。首。領。は。時。が。た。つ。に。れ。次。第。に。乗。組。員。の。人。望。が。エボシに。傾。いて。行。く。こ。と。に。いた。ら。う。荒。れて。酔。て。暴。れ。て。船。に。火。を。つ。け。そう。に。な。つ。た。と。な。エボシの。浮。気。を。疑。て。手。下。を。皆。殺。し。に。し。よう。に。な。つ。た。な。な。と。い。う。た。く。の。騒。ぎ。果。て。に。エボシに。射。殺。さ。れた。と。い。う。妄想。も。も。ある。明。で。食。糧。の。略。奪。に。行。き。その。村。で。の。首。領。の。目。に。余。る。乱。暴。ぶ。り。に。つ。いて。エボシが。制裁。を。加。え。た。と。考。え。て。も。い。い。エボシに。惚。れ。ぬ。い。て。骨。抜。き。と。な。れ。と。う。う。う。尊。厳。を。か。か。れた。と。い。う。チ。イス。も。当然。あ。り。う。る。も。し。首。領。が。父。を。滅。ぼ。した。仇。で。ある。なら。当然。い。つ。は。仇。討。ち。を。と。エボシは。考。え。て。い。た。な。ら。う。し。

日本へ帰る

首領を殺して。さ。エボシは。う。う。した。が。当然。手。下。たち。と。話。合。い。が。持。た。れ。た。な。ら。う。エボシの。指揮。の。も。と。今。の。生活。を。続。け。た。と。い。う。声。が。あ。つ。た。か。も。知。れ。ず。これ。を。機会。に。

エボシ幻想曲①

この映画の中で一番感情移入がしやすいか。こいのはエボシ御前だ。いろいろ想像をしてみたくなる。いた。う。い。う。過去。な。か。こ。こ。から。ち。や。て。来。た。の。か。い。かな。る。身。分。の。女性。か。この。地。に。多。う。場。を。築。き。砂。鉄。を。採取。し。実。に。種子島。の。鉄。砲。伝。来。二。五。四。三。年。に。約。一。世。紀。先行。して。石。火。矢。や。火。縄。銃。を。自在。に。あ。や。つ。る。小。兵。団。を。指揮。し。て。いる。か。つ。自身。も。名。射。手。の。よ。さ。だ。また。エボシの。突。撃。を。迎。え。撃。つ。た。劍。の。腕。前。も。た。だ。の。で。は。ない。明。ら。か。に。風。の。谷。の。チ。ウ。シ。カ。の。女。将。軍。ク。シ。ナ。の。系。譜。に。つ。ら。なる。被。女。に。宮。崎。さん。は。も。と。も。愛情。を。め。力。を。入。れ。い。い。場面。を。作。て。いる。よ。う。に。思。わ。れる。タイトル。ロー。ク。の。もの。の。け。姫。サン。より。も。実。は。う。と。好。き。な。は。エボシ御前。じ。や。な。ら。う。か。

遊女と倭寇

彼女の年齢はわからないが、相当な苦労をしな。い。と。あ。れ。だ。け。の。人間。に。な。ら。ない。だ。ら。う。それ。に。う。考。え。て。も。あ。の。身。の。な。し。や。勇。気。決。断。力。から。は。農民。や。商人。より。は。武。家。の。娘。に。う。感。じ。が。否定。で。き。ない。

大体、鉄砲伝来より一世紀前にな。な。あ。れ。だ。け。銃。の。知識。が。ある。の。か。当然。その。頃。の。日本。に。は。な。く。も。外。国。に。は。火。器。が。存在。する。それが。日本。に。流。れ。込。み。な。ぜ。か。歴史。に。痕。跡。は。残。ら。な。か。た。使用。さ。れ。た。と。か。ある。と。い。う。仮。説。は。こ。と。も。お。も。し。う。

話の舞台は製鉄が古くからさ。か。な。な。出。雲。地方。だ。ら。う。が。エボシは。の。土地。の。者。で。は。ない。出身。は。ち。と。西。三。九州。だ。ら。う。だ。ら。う。室。町。時代。の。少。し。前。南北。朝。時代。に。も。九州。は。かなり。明。国。と。接。触。し。て。いる。し。明。国。から。贈。ら。れ。た。日本。国。王。の。印。な。な。の。も。も。ある。幕。府。の。力。も。と。き。か。ね。る。富裕。な。九州。大名。の。娘。か。

明国から輸入された珍しい書物や文具。装身具に囲まれて。育。た。美。い。お。お。し。の。娘。う。ー。ん。貿易。に。熱。心。だ。ら。う。島。津。の。一。族。と。でも。考。え。て。み。な。か。

彼女が小さかった頃のユリイドもいろいろ想像でき。う。武。芸。に。秀。で。馬。で。駆け。回。つ。て。いる。少女。時代。も。初恋。の。人。が。た。か。う。な。ま。は。は。わ。か。ら。ない。いた。ら。う。だ。ん。な。タイプ。だ。ら。う。か。少。なく。も。軟。弱。な。男。じ。や。な。ら。う。

しかし父親が対立する大名との争いに敗れて亡。く。な。つ。た。と。し。たら。貿易。の。利。権。争。い。に。も。暗。殺。う。幕。府。が。い。そ。か。

足を洗いたいという者がいたかも知れない。

エボシは。も。日本。に。帰。る。決心。を。した。生。まれ。故。郷。に。は。も。う。親。兄。弟。も。知。つ。た。人。も。い。ない。け。れ。ど。やはり。日本。へ。帰。る。う。う。「足を洗いたい。者は。さ。つ。す。れば。いい。気。持。ち。で。ち。う。別。れ。よう。去。る。者は。追。わ。ない。と。ま。ま。も。運。命。を。共に。し。よう。な。と。思。わ。ない。で。いい。」

「エボシは。言。つ。た。か。も。知。れ。ない。

「エボシは。言。つ。た。か。も。知。れ。ない。」

「エボシが不機嫌に聞き。その言葉につな。い。た。男。たち。が。何。人。か。いた。

「それなら。好き。に。する。が。いい。」

「私は。少。し。大。きな。計画。が。ある。それ。に。も。つ。て。来る。か。」

「どうして。と。」

「乗。り。出。す。コ。ン。サ。」

「今。ま。の。荒。つ。ぱ。い。仕事。より。も。と。大。仕事。に。なり。そう。だ。ひ。う。と。す。ると。天下。を。覇。が。す。こ。と。に。なる。か。も。知。れ。ぬ。命。が。け。つ。い。う。覚。悟。は。ある。か。」

「お。も。し。う。い。」

男。たち。は。う。う。と。笑。つ。た。

そんなやりとり。の。あ。つ。た。エボシは。こ。ん。な。こ。と。を。考。え。て。帰。国。し。あ。の。シ。ン。神。と。千。石。の。君。が。君。臨。す。る。森。ま。で。や。つ。て。来。た。の。だ。ら。う。か。

多。う。製。鉄。その。もの。は。日本。に。かなり。古。く。から。あり。エボシが。開。発。し。た。わけ。で。は。ない。しかし。火。薬。や。銃。砲。に。つ。いて。学。ぶ。間。に。エボシは。あ。ら。ゆる。知識。や。情報。を。収集。し。吸。収。し。て。い。た。はず。帰。国。する。と。その。当。時。の。国内。の。政治。や。戦。力。に。つ。いて。の。情報。も。集。め。始。める。国。々。を。渡。り。歩。く。修行。僧。や。行。者。山。伏。旅。芸。人。など。と。接。触。を。持。ち。報酬。も。与。えて。情報。収。集。者。として。利用。し。は。じ。める。ジ。コ。坊。と。の。接。触。は。こ。で。始。まる。ジ。コ。坊。の。過去。ま。は。今。回。考。え。切。れ。ない。が。大。い。な。る。野。望。と。一。歩。ひ。い。各。藩。主義。と。混。在。する。この。男。は。エボシ。に。ある。可能性。を。見た。す。べ。れた。戦。士。人。心。掌握。力。カ。リ。今。性。合理。主義。者。か。人。間。を。す。べ。平。等。と。見る。その。姿勢。ジ。コ。坊。は。惚。れ。込。ん。だ。ら。う。し。も。しか。す。と。と。出。雲。の。辺。境。を。開。拓。し。て。多。う。場。を開。き。製。鉄。と。武器。製造。を。と。す。め。た。は。彼。か。も。知。れ。ない。諸。藩。を。渡。り。歩。く。ジ。コ。坊。は。も。う。一。人。の。女。傑。の。台。頭。を。目。撃。し。エボシを。被。女。に。対。抗。できる。人。材。見。た。の。か。も。知。れ。ない。

応。仁。の。乱。直。前。その。拔。群。の。経済。セ。ン。ス。と。利。殖。と。税。制。改。革。で。室。町。幕。府。を。建て。直す。将。軍。の。正。室。日。野。富。子。が。次第。に。勢力。を。強。め。始。め。て。いた。…。(お。か。た。さ。の。み。)

*If we can let light into the forest,
and suppress the gods,
this could become a wealthy country.*

森に光が入り
山犬共が鎮まれば
ここは豊かな国になる。

コミュニケーション(共同体)としての タタラ場

【エボシ御前の野望】

Commune Tatara as commune and Eboshi's Ambition

エボシ幻想曲②

エボシのタタラ場はふしぎな場所である。湖のまん中の小島に築かれた上二重三重に防護柵をめぐらし、さながら砦、いゝ要塞だ。現に押寄ぜた地侍も女性たちに行き渡つた銃の威力もあるが、心臓部はついに落とせなかつた。最初からエボシはタタラ場を事ある時は要塞化可能な設計にしていたのだ。これはちよと海賊の作戦領域ではなさうで、やはりジコ坊経由の新知識では。

そこで多々場の構成要員が氣になる。まず玉子の側近はかつての海賊仲間《石火矢乗》というのは傭兵集団でジコ坊の口きまで《師匠連》なら多々場の兵力として借りたらしい《師匠連》がよくわからないのだが、お上の方の影の内閣みたいなものかしら。石火矢乗、唐拿連などという傭兵たちの火器のノウハウも玉子が教えたのか？。とにかく、彼等はも者だ。そのほか牛飼いな、働く男たちはどうも普通の農民などではないな。被差別民？。例へば、ナウシカ原作の虫使いたちのような。

女たちは、売られる、という言葉からわかる、貧農の娘たちと遊女だ、かつてホシもその境涯にあり、そこから自力脱出はできなかったし、のちに海賊にちて解放された時も、おなじ仲間の女たちを誰ひとり連れて出ることはできなかった。そのつらさくやとはは彼女以外誰も知らない。

「ホシは心の内を語らぬまま、機会あるごとにそんな女たちを買い取つて解放した。故郷へ帰つた者もあるだろうが大半は帰つたところまでまた売られるのがわかつてゐる。だから恩人のホシのもとで重労働の多き作業に、いそひ鉄を産み出し、それで食糧や衣料を得て維持する。風変わりな生産共同体の中で生き生きと暮らしている。」

こんな生活や集団はかつてにも無かつた。自分たちの労働によつて、自分たち自身で支へ、経営する自治のコミュニティ。傭兵は別として、構成するのはすべて犯罪者、被差別民、遊女、そして皆の一隅で銃の製造、改良作業に没頭する病者の一団。ここにこそ社会から共生を拒まれた人々だ。

全身を包帯で包んだ病者たちは、おそろしくこの時代
ひこひかて近年まで治療の方法はないと思われて
来た難病の患者であつた。皮膚が変色し体が変形し
壊死して進行する病に薬はない。崩れ行く体を抱え
て死を待つのみだた彼等をもまた、エボスは差別せず
迎へ入れる。そのころは彼女もまた遊女時代に形は
違つが絶望的な病氣に苦しんだ体験があつたのではと
思ふ。

規格外の共同体

「ホシがシタカをともなへて病者たちの工房をおとずれる。月光が返る夜の場面は映画全編の中で最も心にしみる。彼等の手になる新しい銃を取り上げ、「すこし重いな」とつぶやくホシ。」そのように軽々と持たれますのに、これほど病者たちはいかにホシの頼もしさが嬉しく誇らしい様子。私ではない女たちに持たせるのだと彼女は答へ、病者たちは、コワヤ、コワヤ、ホシ様は國崩しをなさるおつもりだと笑う。このあと呪われなシタカの右腕が暴れ、殺氣を感じ取つた長（すでに視力も失つてゐる）が、その方を殺さないうでください」とシタカに告げる。ホシは自分たちを避けず、さげすみ、崩れた体に布を巻いてくれた。しばしの時が流れ、立ち去りながらホシがやはりちょっと重いなとつぶやく、病者たちが、「こわや、こわや」と静かに笑う。いいシーンです。なんか黒澤映画を見てもうな気持ちになつてしまつた。

この長は、どういふ人物だろう。かつてエボシと出会ったとがあるのが、エボシは、その人物から何か恩を受けたとでもあるのだろうか。もしかしたら、この長はその昔医者であり、遊女の時代のエボシの大病を治してくれた恩人なのかも知れない。仮にそうだとすると、もはや物を見ることもかなわぬ長は、それが過ぎ

信長の終攻撃にはとうとう日ならずして崩れ、山の奥の奥まで追撃されて男女を問わぬ死体が地を埋める大虐殺、一人残らず殺されてしまふ。このあたりの話は高橋治の「さまよう霧の恋歌」の中にくわしく描かれていゝので、読んないゝらなむ。

加賀一向一揆の始まりは「ものけ姫」の幕が降りてから四・五年あとかと思われるが、玉子の王女からやはり各地の情報使は仕入れていただろう。へ百姓の持ちたる国」に何の関心もなかったとは思えない。もしししたら一向宗徒たちと製鉄や銃の製造法を教えしなかならうか？その上がへ百姓の持ちたる国」を百年続かせる自衛力につながらしなかならうか？そして皮肉なことにこの映画の登場人物が一人もいなくなつた後、その火器をより強力に備へた魔王のような征服者によりて日本最初の農民自治国が痕跡も残さず消えてしまふ原因となりはしなかならうか？

「隊列を組み直せ！」

そこまで飛躍する前に、あのあとタタラ場がどうなるか、こゝ想像してみよう。エボシは右腕を失つた。タタラ場に運び込まれるまでおそろゝ意識不明だつたらうから、結局シン神の首がどうなつたかは見ていない（しかしあの瞬間「長靴をはいた猫」と「天空の城」の「タ」が頭をかすめたなあ、へ朝日か、滅びか、と一瞬思つちやつた。あの首を時の朝廷に獻じて、彼女が何の保証を得ようとしたのか、これほどの権限を約束させようとしたのか、そしてそれを手初めにかゝる野望を計画していたのかはもうわからない。第一、合理主義者の彼女が本当にあの首に不老不死の力があると思つていないや、入不老不死、そのものを信じていたなどうかも知らない。焼け落ち、青々と草に覆われてしまったタタラ場を、彼女はどうしたろうか（平成狸合戦ぽんぽこ）のラストに似てましたね。いや、別にあつた。再建地を捜したやつ。

と言ひながら彼女は連れて帰ってくれたコンサに（あの一瞬の応急手当は速なたぞ海賊時代にもけが人が出るイヌはしばばあたらうしなあ、タタラ場を守り抜いた女たちにして）島本須美のおトキカゴよ

日出会。た女性とはわからないのかも。妄想は、何でもふくらむ。一方だし、この悲しい病者たちが銃製造の技術者集団となつてタタ工場にいることもまた、非常に象徴的だ。どうも手足が不自由、どこか指を失つてゐるのではないかという人物もいる。それが精密さを要求される職人として、命ある限りを玉砕のために働いている…。胸を打たれるシークエンスである。思へばこのタタ工場にいるのはすべて、普通の人から見れば規格外の人々だ。世の中からも、どうな扱いを受けてゐなかつた受けられなかつた人々がひとつに集つて、玉砕を中心に仲良く生きまいる。この類例のない小さなコミュニティは「太陽の王子、ホルスの大冒険」以来高畑勲さんと共に宮崎さんが考えを来た主人公が守るべき其同体への極めて特色ある痛切なバリキ・シシとして記憶されるべきだ、とつ。

百姓の持ちたる国

類例のない「三ツテ」と言つたが、時代は動いている。十五世紀に入つてから各地で一揆が発生した。特に加賀の「一向一揆」は一四七四年（応仁の乱はまた続いてゐる）に國中の侍を追放し、ついに守護大名の富樫政親軍を討ち破り、富樫を自刃に追い込んでゐる。發生の背景に信仰弾圧があり、本願寺・一向宗の信徒組織がベースから年貢の苛酷さゝ農民が蜂起するタイプの二揆とはちうと違ふが、凄いのは一揆追放から約百年間、加賀に自治の國を作つてしまつたことにある。歴史上大百姓の持ちたる國と呼ばれる時代が約一世紀続いたのだ。大正と昭和と平成を足したより長く！

この百年の自治国は、一五七五年に消滅する。滅ぼしたのは織田信長。武田勝頼軍が織田・徳川連合軍の圧倒的な火器の物量の前に壊滅する。あの「長篠の戦い」の直前だ。一向宗徒の方も相当量の銃と弾薬を備えており、特に本陣・石山本願寺・天叡の軍備は強力。殺到する織田軍にすさまじい銃撃で応酬。信長が負傷する場面もあった。信長が対武田戦にあれば、どの鉄砲隊を組織するのは、本願寺・一向宗徒との約十年に及ぶ戦闘で苦い体験をくり返したからなのだ。

それだけに、強力なプロ戦闘員と相手を上回る物量の火器で重裝備した織田軍の各地の一向宗弾圧作戦は目を覆うすさまじさで、加賀百年の自治国も

かつたやつぱりナウシカ！、アシタカに感謝し…。彼等を捨てて去ろうとは思わなかったと信じる。

自然破壊者には違いないが彼女は開拓と新しい産業の開発、その結果の経済力にちて前人未踏の新しい共同体を作ったそれも、虐げられ、さげすまれて来た人々を市民として、「ものけぢ姫」最大の悪役はホシであり、また最も魅力ある人物でもある。揺れ動く現代、いや二十一世紀にもその魅力は変わらず、求められ続けるのではなかつたか。

残念ながら、長を召病者にかなりの犠牲者が出た。たゞたゞがてて工作部も、隊列を組み直して仕事を再開するであらう。まず第一に見事な義手を、次に左手だけで操作可能な拳銃を「ゴムザ」や「タシタカ」が左右に居る。恐れることは何もない。室町時代、応仁の乱の初期、都を遠く離れた西の国のいまだかつてない共同体を産み出したロイヤルは、文字通り鉄の女だった。それから幾星霜、一八七一年、わずか二か月輝いて滅び去る、世界最初の労働者政権「パリ・コミューン」の登場まで、また四百年という時間が必要なのだ。

（おかだえみこ）

民俗学者である早川孝太郎氏の著書『猪・鹿・狸』の序文に、肥後の五箇床（熊本県八代郡）に伝わる以下のような実話が紹介されている。「猪の群を遠巻きにして一群の狼がいる、それはあたかも海で鯨の大群を囲んだ鯨のように、機を測っては外側から蚕食している、猪の中には真っ黒い毛を持ったもの、または黒と白の斑毛のもの、全身が白毛に包まれたものもいた。そうして山から山を幾日もかかって移動していた。あのおびただしい猪の群は一体どこに落ちていったものか、狼は……。それが不思議でならない。」

かつて、この国の大型動物の多数派は人間ではなかった。この国の森には、人間の二倍とも三倍とも言われる膨大な数の動物たちが棲んでいた。森の主人は、鹿であり、狼であり、猪であり、猿であり、狐や狸であった。獣の棲む森の中は、人智の到底及ばない神々の世界であったのだ。

サカキの木と「あの世」の島

死にかけたアシタカをサンが連れて行った場所それは森の深部にある不思議な中州（島）であった。サンは、サカキの小枝を折ってアシタカの頭の前に刺した。それが墓標の意味なのか、シシ神への何かの符号なのかは不明である。そこは生と死の境目の島であり、シシ神が現れる場所であった。シシ神はここでディダラボッチへ変化するのである。いわば、森の心臓部である。夜は月明かりが射し、昼は陽光が射す。静かで穏やかで、この世とは思えない場所である。

中州は、水（神界）と地（俗世）のせめぎあう土地として神聖視されていた。中世に中州で市を開いた職人たちが多かったのもこのためと言われる。『古事記』のイザナギ・イザナミ神話でも、一



面の泥海を矛でかき回して出来た中州島（オノゴ口島）に降り立って結婚したとある。天と地を結ぶ場所、生と死を司る場所の典型と解釈すべきではないか。

サカキは、「榊」「賢木」の字に明らかのように「神」の宿る「木」と言われている。神社の境内などによく植えられる常緑樹である。太古より祝い事や神事に欠かせない樹であり、僧侶や巫女はサカキを両手に持って呪術的儀礼を行っていた。現在も、シメナワと共によく用いられる神具である。また、サカキを枕元に敷いて寝ると舌夢を見ることがある。サンは、アシタカが苦痛なく天界へ旅立つことが出来るよう、サカキを頭の上に刺したのではないか。

ところで、作品の舞台となった室町時代には、次のような不思議な絵が描かれている。

それは、神鏡に映る十一面観音と鹿を描いた『春日鹿曼陀羅』という絵である。この絵では、鹿の背にかけられた鞍に、神鏡を支える神木が立てられている。それがサカキなのである。観音↓サカキ↓鹿という構図は、室町時代に鹿を神仏の使いとする信仰があったことを示すと言われている。

鹿信仰

物語の鍵を握る幻の神・シシ神は、漢字で「鹿神」と書くことができる。その名通り身体は鹿だが、頭は人に見えることもある。その形状は諸星大二郎の描いた漫画『孔子暗黒伝』に登場した「開明獣」を彷彿とさせる。（宮崎監督は同作品の熱心なファンであった）物語では、その血に不老不死の魔力があると伝えられる鹿神だが、この設定にも史実の影を感じる。

中世の僧侶の旅支度には鹿衣と鹿杖（鹿角の付いた杖）は欠かせないものであった。『梁塵秘抄』にも「聖の好む物、木の節・鹿角・鹿の皮」とはっきり記されている。これには仏教的な理由がある。一つは、釈迦が入山した際にまとっていたのが鹿皮と鹿杖だった。もう一つは、空也上人（元〇三〜九七二）の話である。上人が修行中に親しんだ鹿が漁師に殺されたことから、あわれみに角と皮をもらい受けて身につけた。このことから



浄土教の流れを組む一遍上人（一二三九〜八九）など時宗一派に鹿杖・鹿皮のスタイルが流行したと言う。

鹿は実際に神として祭られてもいた。筑前の志賀島は、古くは「鹿島」と表記された島で、志賀海神社には一万本の鹿角が祭られている。鹿は群をなして海を渡る動物と言われ、海人との関係が深いとも言う。東北には前述の「鹿随」の風習がある。日光では、今も狩猟の際に鹿の頭に祈りをささげる風習がある。

鹿の美しい皮としなやかな肢体は、古来より狩



シシ神の森

【生と死を掌る神獣の森】

The Forest of Shishigami : The forest of animal gods who preside over life and death

人たちの格好的とされ、徹底的に狩られて来た。中世に於いて「狩」とは「鹿狩り」のみを指す用語だったと言う。また、狩人たちが鹿を祭るのは供養の意味もあったと言う。潤んだ大きな瞳に、死に行く獣の哀れみを感じた為か。

なお、司馬遷の『史記』に『秦其ノ鹿ヲ失ヒ天下共ニ之ヲ逐フ』とあり、これに由来する「鹿を逐う（互いに政治権力を得ようと競争する）」という故事もある。『もののけ姫』の物語はまさに「鹿を逐う」話である。

シシ神・生死を司る神秘の自然

作中のシシ神は、生命の授与と奪取を行い、新月に生まれ、月の満ち欠けと共に誕生と死を繰り返すと言う。

月の満ち欠けが生物の生死に関わるという説は多い。海に棲む魚類や甲殻類には、満月を選んで産卵する種族が多い。

人間の場合も、潮の満ち欠けと同じように、体内の水圧・血圧が高まると言う説がある。月の引力が高まる満月・新月には、出産率や死亡率、さらには事故率・犯罪率まで高まると言うのだ。満月になると変身する「狼男」の話なども、月の引力が体内を変化させる性質に注目したフィクションではないか、とする説もある。

シシ神の存在は、月と連動する生死の神秘と関わるものかも知れない。

また、カモシカのように大きいシシ神の角は、樹木で出来ていると言う。角に魔力があるという信仰は多いが、森の神として樹木を頂いているのか。また、生物の頭には力が宿るという信仰は多いが、頭部が人間に見える（変化する）のもこの為か。

シシ神は、何とも解釈しがたい不思議な表情をしている。

宮崎監督は、かつて映画『ネバーエンディング・ストーリー』（一九八四年西ドイツ／ウォルフガング・ペーターゼン監督）の龍や亀の擬人化された顔形を嫌い、作者の自然崇拜の貧困さが透けて見えるとして痛烈に批判していた。

「何を考えているかわからない方が、自分たちにとってほかに憧れの対象になるんです。要するに人間が擬人化して、感情移入しやすいものにすればするほど、つまらなくなるのですね」「簡単には理解できない存在、力みたくないものへの憧れが、どうも初めからある。」「そういう自然観を自分たちが持っている」（『季刊ichiko』No.33号掲載／対談『メタファーとしての地球環境』）

シシ神の表情は、人間には解せない自然の摂理や真理とでも言うべきものを内包しているからと解釈すべきだろう。それは、人間感情を自然に対しても押し付ける擬人化を嫌い、自然は人間の理解を超えた存在と考える監督の自然観が生み出したものであった。

森の生き物

【夜の神獣・精霊】

The Living Beings of the Forest
The Animal Gods of the Night Spirits

ディダラボッチ

唐草模様で覆われた夜の闇

シン神の夜の姿であるディダラボッチは、世界各地に伝わる巨人伝説を彷彿とさせる。天を覆う不気味な巨人は、まさに夜そのものである。

直接的には、関東一円に伝わるダイダラボッチ伝説に語源を求めることが出来る。ダイダラボッチは身長足長の巨人で、深夜に出没して橋や建物を動かすと言われている。東京都世田谷区ではダイダラボッチがかけたと言われる橋があり、地名もこれに由来して「代田」と名付けられている。ダイダラ伝説の中には、頭を奪われて凶暴化したダイダラが土地を荒らすという、作品そっくりの内容もあると言。

沖縄本島には、アマンチュウ（天人）が岩に踏ん張って天を押し上げ、空を高くしたという巨人による創世神話が伝えられている。

作中のディダラボッチは、宵闇に広がり天を覆う。灯の少なかった時代（室町時代にはエゴマ油によるランプ程度はあった）には、夜は神々の独占する時間であったのではないか。照葉樹林から発生して、果てしなく広がる巨大な暗闇。それは畏怖すべき悠久の自然の猛威と人間の矮小さを痛感させる。

また、全身半透明のディダラは「唐草文様」らしき斑紋で覆われている。唐草文様は、植物の花や葉の形を蔓状のリズミカルな曲線で繋いだものである。古代エジプトを発祥地として、ギリシャで完成されたと言われ、中国・朝鮮を経て日本に伝えられたのは古墳時代ではないかとされている。

唐草文様は、世界各地にヴァリエーションを持つ。中でも「波状唐草」は、山と谷を表す記号（等高線のようなもの）であったと言。作中のディダラの文様ははっきりとは分らないが、唐草であれば、山の神の紋章という意味ではないか。



猩々

日本文化に深く根ざした怪物

「猩々」と書いて「しょうじょう」と読む。大形の類人猿であるオラン・ウータンの俗称を指すと言。だが、本来の意味は、古代中国に伝わる伝説の怪物で、猿の一種とされる。『広辞苑』（岩波書店）には、「人に似て体は狗の如く、声は小児の如く、毛長く、その毛色は朱紅色で、面貌は人に類し、よく人語を解し、酒を好む」とある。日本にも「猩々」という演題の能がある。内容は酒に浮かれた猩々が舞を舞うというもの。猩々の役者は、赤い能面をつけて演じる。原型となった猩々の伝説が古くからあったと思われる。

また、赤褐色は猩々の血で染めた色と言われ、「猩々緋」と呼ばれた。赤褐色の葉や花を持つ「猩々木」「猩々草」、鮮血色の美しい「猩々鰓」などの派生語がある。更に、酒や甘味が群がる習性のある蠅は「猩々蠅」と名付けられ、酒豪の人を赤ら顔にたとえて「猩々」と呼ぶ風習もある。このように、猩々は日本人の生活文化に深く根を下ろしている。その関連語彙は、同じく古くから親しまれた「河童」以上かも知れない。よほど身近にいたと信じられていたのか、あるいは過去



木植えた、木植えた、木植えた。
皆人間拔く。森戻らない。
人間コロシタイ

に大形猿人か何かの怪物が実在していたのかも知れない。
作中の猩々は、群を成して闇に出没する。両眼は赤いが、体は黒々としている。まるで、亡者か餓鬼のような描かれ方で、神の一族としての誇りは感じられない。これは、宮崎監督独特の猩々像と言えそうだ。
ところで、エボン御前の小袖はまさに猩々の血を思わせる「猩々緋」で染め抜かれており、「穢れを払う」象徴と言われた「扇子」が染め抜かれている。扇子の黄色は、チベットのラマ信教の衣裳「黄衣」にあるように、「神の色」であったとも言。これは単なる偶然なのであろうか。 (戸)

コダマ

木々の死と共に死に続ける精霊

コダマは、「木霊」「木玉」などと表記し、樹木に宿る精霊のことを指す。いわゆる「山彦」のことではない。山彦はコダマの為せる技のほんの一つではないと言。

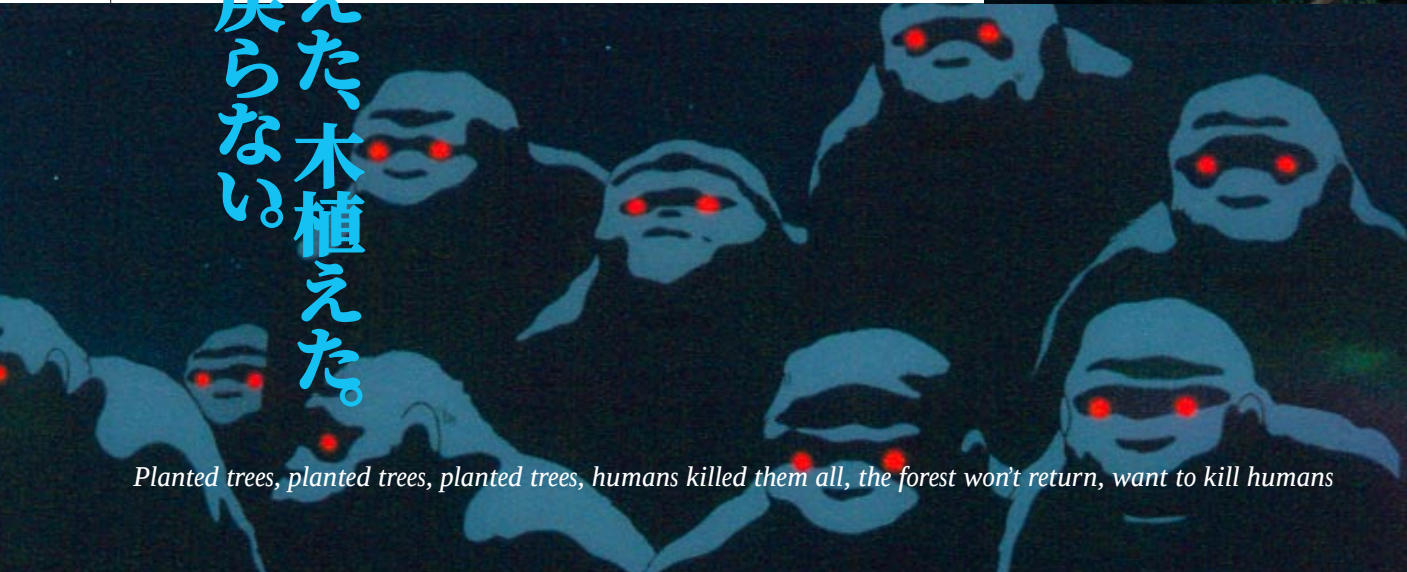
鎌倉期に編まれた『天地履気記』によれば、山の神の群族として「木玉神」「応音神」がいると言。これらは、「天の声」を発する類の神であり、時には人を死に至らしめるとも言う。

『今昔物語』の中に、次のような話がある。ある舎人が山中で独りで歌を詠んだところ、「面白い」という声が聞こえた。恐ろしくなつて戻ったが、うなされて死んでしまったと言。

八丈島や青ヶ島には、森の伐採の際に、コダマの宿る樹を伐るとタタリがあるという伝承が多くある。伐採の際には必ず一本残し、コダマサマを祀り供養をすると言。

作中のコダマも木々の精霊と思われる。木々の数だけ増え続け、木々の死と共に死に続ける。可愛らしく滑稽なその姿は、何故か人の子供のような形である。木々が人間にさり気なく訴えるべく現れた姿なのか、あるいは人の眼を通すとこんな形に見えてしまうのか。

いずれにしても、宮崎監督が「木々の一本一本に生命が宿っていることの重さ」をヴィジュアル化する試みであったと思われる。それは、ラストショットに明らかなように、作品のテーマに深く通じる設定である。



Planted trees, planted trees, planted trees, humans killed them all, the forest won't return, want to kill humans

モロの君

【絶望、諦観と嘲弄とやさしさと】

Moro Despair, Clear Vision, Mockery and Gentleness

モロの君と狼族

モロの君は巨大な狼である。

「狼」は「山犬」とも呼ばれ「大神」とも書く。農作物を荒らす狸や鹿を退治して食らうことから感謝され荒ぶる神として祀られていた。

近世までの人々は猪や鹿の作物荒らしに為す術もなかった。案山子や見張り小屋の泊まり込み落とし穴を掘っても襲い来る獣たちの数の前にはさして効果がなかった。彼らの天敵である肉食動物「狼」による捕食つまり食物連鎖は感謝に堪えないものであった。

「落として穴にかかた狼を逃がしたところ翌日鹿一頭が返礼に置いてあった」という類の昔話が全国に残っているのもこの為だ。

一方、家畜や人間を襲う凶暴な獣という面もある。仔狼を人間に殺された狼たちが群を成して人家を襲ったという伝説、背後からヒタヒタとついて来て転んだ途端に襲うという「送り狼」の伝説などである。（素談だがアシタカが市場を出て地待に付けられる件の絵コンテに「送り狼」と記されている。）いずれも人間が真つ当に生きていけば襲われないという奇妙な共通点があり「天罰」的含意がある。

日本の狼伝説には、西欧童話のするがごとく愚かな狼像と違い毅然とした神の風格がある。特に白い狼は神の使いと言われた。自然界の突然変異種である白子（アルビノ）種は大変貴重であることから神聖視される傾向があった。白蛇を御神体として祭る信仰などはその典型である。

モロの君の猪族に対する皮肉な態度や人間に対する怒りは歴史的に優位に立つてきた森の主たる狼族の誇りがそうさせるものであろう。あるいは雑食動物への肉食動物としての蔑みか、彼らのタマラ場への攻撃はまさに「天罰」としての攻撃ではないか。

その後開拓が進んで生息地が狭まると狼たちは人里の下りて専ら家畜や人を襲うようになり、人間への狂大病被害も深刻となり、各地で徹底的な撲滅作戦が組織された。狼狩りには賞金が出された。岩手県では四斗俵の米一俵が一円五六十銭の時代に牝一匹七円、牡一匹五円、仔一匹二円の高額賞金を出した。人々はぞつて狼を狩った。こうして「オオカミ」は一九〇五年には絶滅してしまつたのである。

一方、天敵を失つた猪や鹿が増えたと云えば、どちらも更に生活の場を追われて激減してしまつた。言うまでもなく、新たな敵は人間であった。

鹿や猪の狩には、農作物を護るという目的もあった。鹿は狩りが容易なため賞金は低額であったが、毛皮目的や食用として徹底して狩られた。猪は、日清戦争（一八九四～九五）前に「豚コレラ」と呼ばれた疫病が流行したことで数を激減させたと言うが、その後も大量に狩られた。

現在も、日光など一部地域を除いて、鹿も猪も減り続けている。

⑧



お前には、あの若者と
生きる道もあるのだが……

There is another path
you can take-the path of life-with that young man.